

談話モデルと指示

— 談話における指示対象の確立と同定をめぐって —

東 郷 雄 二

第1章 はじめに

1.1. 談話モデルと指示対象

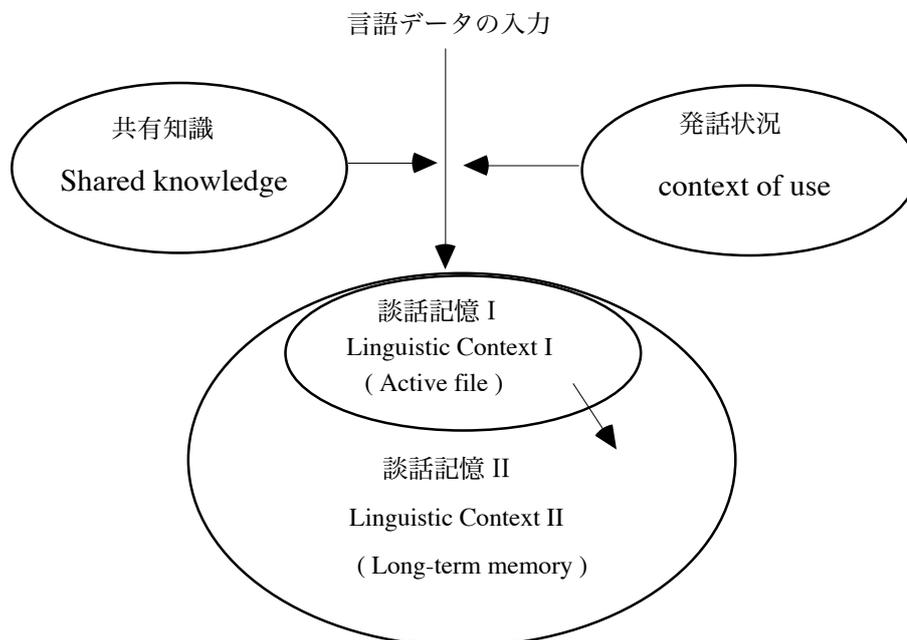
まず最初に談話 discourse とは何かを定義しておきたい。

「談話とは、話し手と聞き手の間の相互作用により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象 mental representation である」

談話は話し手と聞き手の相互作用として構築されるものである。談話構築に際しての重要な操作のひとつに、指示対象を談話のなかに導入し、それに言及するという操作がある。対象を新たに指す場合は「指示」、一度言及されたものを受ける場合は「照応」であり、指示と照応は談話操作の重要な一角を占めている。

指示と照応の操作は、話し手と聞き手の間での相互作用を介しての交渉によって進行する。たとえば、「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」という発話で談話が始まると、この文に含まれた名詞句「おじいさん」「おばあさん」によって、聞き手の談話モデルのなかに新たな指示対象が導入される。

談話モデル discourse model とは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的表象をさす。談話モデルには、導入された対象が登録され存在する心的領域として、「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」の三つを有している。その三者の関係は次の図式で表すことができる。



談話モデルのなかに登録された指示対象は、後続談話で定名詞句や代名詞を用いて照応することができる¹⁾。

1) 例文中のイタリック体の部分は先行詞を、ボールド体の部分は照応表現を示す。また*印は容認されない非文法的な文であることを示す。また例文に添えた英語は、フランス語例文の意味をできるだけ逐語的に訳したものであり、英語として必ずしも自然というわけではない。

- (1) a. Il était une fois *un prince très malheureux malgré son beau château*. **Le prince** ne pouvait pas avoir de fils.
 “Once upon a time there was a very unhappy prince despite his wonderful castle. The prince couldn't have a son.”
 b. *Un homme* descendit du train. **Il** portait un chapeau noir.
 “A man got off the train. He was wearing a black hat.”

しかし、文中で用いられたすべての名詞句が、談話モデルに指示対象を設定するわけではない。次例 a. の属詞位置の名詞句や、b. の複合名詞句中の名詞は、非指示的であり、指示対象を設定しない。

- (2) a. Jeanne est *un professeur de mathématiques expérimenté*. ***Il** sait bien son métier.
 “Jeanne (fem.) is a professor of mathematics with broad experience. He knows well his job.”
 b. Marc est *professeur de lycée*. ***Il** a été fondé au XVII^e siècle. (il = lycée)
 “Marc est a high school teacher. It was founded in the 17th century.” (it = high school)

このように非指示的に用いられた名詞句は、談話モデルのなかに指示対象を設定せず、存在前提を持たない。

1.2. 照応のパラドックス

さて、ここで本稿で解決すべき問題の設定をしよう。Milner (1976 : 70) と Kleiber (1986) は、フランス語の照応現象について、次のような興味深い指摘をしている。

- (3) a. Il y a *un dictionnaire* sur la table. { ***Le / Ce** } dictionnaire ... (Milner 1976)
 “There is a dictionary on the table. { The / This } dictionary ...”
 b. Il était une fois *un prince*. { ?**Le prince / Ce prince** } (Kleiber 1986)
 “Once upon a time there was a prince. { The prince / This prince } ...”
 c. Il était une fois *un prince*. ?**Il** était grand et fort. (*Ibid.*)
 “Once upon a time there was a prince. He was tall and strong.”

これらの例では、第一文で導入された指示対象を受ける照応表現として、定名詞句や人称代名詞は容認度が低く、指示形容詞句の方が容認度が高い。(1) では定名詞句や人称代名詞による照応が問題なく容認されていることを考えると、この結果は不思議と言わざるをえない。これは「直後の受け直しのパラドックス」*paradoxe de la reprise immédiate* として知られている現象のひとつである。

さらに興味深いのは、条件が整えば、上記の例でも定名詞句による照応が可能になるという事実である。Milner (1976) は、第一の文と、照応表現を含む第二の文の間に、他の文が介在することで、先行詞と照応表現の距離が大きくなると、定名詞句による照応の容認度が向上する指摘している²⁾。同様の指摘は Corblin (1983) にもある。Corblin によれば、挿

2) “Cela est vrai de la reprise immédiate, mais si la reprise est éloignée, autrement dit, si entre la première occurrence et la seconde interviennent d’autres énoncés identifiant davantage le segment en cause, *le* est optimal et non *ce*. Cela semble indiquer que, dans la reprise immédiate, le premier énoncé, sous la forme citée, n’est pas suffisamment identifiant pour rendre superflue la coréférenciation imposée par *ce*.” (Milner 1976 : 70の注)

入される文は、先行詞と照応表現のあいだでなくて、その後でもよいという。

(4) a. Il y a *un dictionnaire* sur la table. La pièce est sombre. **Le dictionnaire** est ouvert.

“There is a dictionary on the table. The room is dark. The dictionary is open.”

(Corblin 1983)

b. Il était une fois *un prince très malheureux* ; **le prince** aimait une belle princesse qui ne l’aimait pas. (*Ibid.*)

“Once upon a time there was a very unhappy prince; the prince loved a beautiful princess who didn’t love him.”

これはどのように説明すればよいだろうか。例文(3)の名詞句は指示的であり、談話モデルに指示対象を設定すると考えられる。それにもかかわらず、定名詞句や代名詞によって照応することができないということは、談話モデルにおける指示対象の確立には、単に対象を談話内に導入するだけではだめで、その上にさらに条件が課されていることを示している。ここではその付加的条件を探ることで、談話構築のひとつの側面に迫りたい。

1.3. 先行研究

この問題に関しては現在までに、Corblin (1983), Kleiber (1984), Kleiber (1986), 春木 (1986) Corblin (1987), Kleiber (1987), 三藤 (1989)、井元 (1989), Kleiber (1991) など、先行研究がたくさんある。紙幅の都合上、先行研究を詳しく検討することはできない。本稿の立脚する談話モデルの考え方にとって重要と思われる仮説に触れるに留める。

Corblin (1983) は定名詞句照応が可能になるためには、語彙の意味領域の間の対照が必要だとしたが³⁾、春木 (1986) は Corblin のいう対照がない環境でも、定名詞句照応が可能な場合があることを踏まえて、次のような原則を提案した。

「ある名詞句の指すものが discours の中で持つ指示対象としての資格が確立されていればいるほど、le N による反復がより可能になる」(春木 1986 : 19)

また井元 (1989) は次のような仮説を提案し、この仮説は le N の照応的用法のみならず、一般の le N の用法にもあてはまることを示唆している。

「指示対象が『発話内世界』の中に唯一存在し、かつ『発話内世界』における位置づけが明確になっている時、それを le N で指示することが可能である」(井元 1989 : 29)

このふたつの仮説は、談話内での指示対象の確立という点に、照応の可否を握る鍵を置いている点で、本稿の目指す方向と一致している。本稿では、指示対象の確立を、より一般性のある談話構築の理論から説明することを目標としている。

その際に本稿が立脚する観点は次の3点である。

- (1) 直接指示 Direct Reference / 間接指示 Indirect Reference
- (2) 発話状況 Context of Use / 値踏みの場 Circumstances of Evaluation
- (3) 同定の深度 Degrees of Identification

第2章 談話モデルの構築と談話世界

2.1. 談話世界の一貫性

3) たとえば次の文では /garçon/ と /fille/ という異なる語彙の設定する意味領域の対比が、定名詞句による照応を可能にすると説明される。 Tu verras un garçon et une fille. Tu dois donner une poupée à **la fille** et une voiture **au garçon**.

指示表現の中には、談話世界の一貫性が必要なものがある。次の例では、第一の文と第二の文とは同じ談話世界を共有しており、代名詞や定名詞句により、照応の連鎖を形成することが可能である。

(5) Bill has a car. { **It** / **The car** / **Bill's car** } is black. (Karttunen 1976)

ところが、Karttunen が「寿命の短い指示対象」 short term referents と名付けた次のような例では、ある範囲を越えると定名詞句で照応することができない。

- (6) a. You must write a letter to your parents and mail *the letter* right away. *They are expecting **the letter**.
b. John wants to catch a fish and eat *it* for supper. *Do you see **the fish** over there?
c. You must write a letter to your parents. *It* has to be sent by airmail. **The letter** must get there by tomorrow.

この原因が単なる文境界でないことは明らかである⁴⁾。様態動詞 must の作用域内に留まる限りは照応の連鎖が保たれるのだが、作用域の外に出ると照応することができない。この例で明らかのように、照応には談話世界の一貫性が必要なのである。

今度は次の例を見てみよう。

- (7) a. John did all the housework while { **his** / ***John's** } wife was ill.
b. John will study linguistics, while **John's** father used to teach literature.

(Haegeman 1984)

例a. では先行詞 John の照応表現として、人称代名詞だけが可能であるが、例b. では固有名の反復ができる。この現象が接続詞 while のふたつの意味に起因することは明白である。例a. では「…する間」の意味で、例b. では「その一方」の意味で用いられている。

例a. では主節と従節とが同じ時空間を共有しており、談話世界が一貫しているのにたいして、例b. では主節と従節の時空間は異なっていて、談話世界が一貫していない。そのことは、例b. の主節と従節の時制のちがいとなって現れている。

2.2. 談話世界の一貫性の構成要因

さて、ではどのような要因が談話世界の一貫性を形成するのだろうか。ここでは、おおむね次の要因が働いているものと考えておく。

(8) 談話世界の一貫性の形成要因

- a. 主題の一貫性 topic continuity
- b. 視点の一貫性 continuity of viewpoint
- c. 時の連続性 tense-time continuity
- d. スペースの一貫性 space continuity

以下、事例をあげてそれぞれの要因を概観する。

4) このような「長距離照応」 long-distance anaphora においては、従来照応現象の解明に用いられてきた c-command のような構造的な概念もまた無力であることは自明である。

2.2.1. 主題の一貫性

まず主題の一貫性であるが、これはしばしば「エピソード境界」episode boundary と呼ばれる概念の一部を成している。エピソードはパラグラフとも呼ばれることがあり、談話のマクロな構造のひとつとされている。ここでは Hinds の次のような定義を参考にあげておこう。

- (9) “(A paragraph is) a unit of speech or writing that maintains a uniform orientation (spatially, temporally, thematically or in terms of participants).” (Hinds 1979 :136)

エピソード境界の例をひとつあげておこう。

- (10) D : The first time it happened I felt very embarrassed. Because that must have been an uncomfortable feeling for *her*. (her=Sally)

S : And you can't even pick up for *her* because you have no idea where *she* stopped.

D : And I don't want to say, “I'm sorry for being so rude and not listening.” But I, uh, just let it happen.

S : What's the relation like between your father and **Sally** now? (Reichman 1978)

最後の S の発話の前にエピソード境界がある。それまでは過去時制であるが、最後の S は現在時制であり、それに加えて話題の転換が起きている。このように境界があると照応の連鎖がそこで切られてしまい、普通ならば可能な代名詞照応ではなく、名詞句照応が用いられることが多い。

この点は英語については Reichman (1978), Clancy (1980)、Fox (1987)、Toole (1996) などが、中国語については Giora & Lee (1996)が、フランス語については Sueur (1990) が指摘している。

ここから次のような仮説を導くことができる。

仮説 1

「エピソード境界では、名詞句から代名詞への照応の連鎖が中断され、代名詞に替わって定名詞句・固有名が用いられることが多い」

Sueur (1990) は、会話フランス語では、エピソード境界で照応の連鎖が切れることのひとつの現れとして、定名詞句の転位が多いことを指摘している。

- (11) a. alors *son père et sa mère* ils voulaient le jeter dans une rivière...
“ then his father and his mother they wanted to throw it into the river”
b. après *les parents* ils arrivent... (Sueur 1990)
“then the parents they arrived...”

ここから次のような仮説を導くことができる。

仮説 2

「エピソード境界では、名詞句主語は転位されることが多い」

このことを考え合わせると、照応連鎖とエピソードの連続性には、次のような関係が成立すると思われる。

仮説 3 照応連鎖とエピソードの連続性

(+) Episode continuity ----- Episode shift (-)
代名詞 < 定名詞句 < 転位名詞句

2.2.2. 視点の一貫性、時制の一貫性

視点と時制の一貫性は、広義のエピソード境界の一部を成すものである。また次のスペースの一貫性とも関連するので、ここでは独立しては論じない。

2.2.3. スペースの一貫性

スペースの転換と照応の関係は、次の例がよく示している。

- (12) a. In Ben's picture of *Rosa*, **she** is riding a horse.
b. *In Ben's picture of *Rosa*, **she** found a scratch.
c. In Ben's picture of *Rosa*, { **Rosa / the girl** } found a scratch. (Reinhart 1983)

上の例 a. では、一貫して絵画の中のスペースが問題になっており、*Rosa* を she で受ける代名詞照応は問題ない。ところが、例 b. では In Ben's picture は絵画スペースを開くが、後続の文は現実スペースであり、このとき代名詞照応ができない。スペースの転換は代名詞照応の連鎖を断ち切ることがわかる。

スペース転換の及ぼす効果は、定名詞句と指示形容詞句による照応の差にも観察されることが知られている。

- (13) a. Le tableau représente *une jeune fille*. { **La / ?Cette** } jeune fille sourit.
"The picture represents a young girl. {The / This } young girl is smiling."
b. Le tableau représente *une jeune fille*. { ?**La / Cette** } jeune fille s'habille habituellement en vert. (Kleiber 1986)
"The picture represents a young girl. {The / This } young girl habitually wears green clothes."

スペースの一貫している例 a. では定名詞句照応がよく、スペースが転換している例 b. では指示形容詞句照応の方が容認度が高い。照応表現としての定名詞句と指示形容詞句には、スペースの一貫性に関して、次のような関係が成立すると考えられる。

仮説 4 スペースの一貫性と照応表現

(+) Space continuity ----- Space shift (-)
代名詞 < 定名詞句 < 指示形容詞句

第3章 談話世界と直接指示・間接指示

3.1. 指示表現と指示領域

代名詞や定名詞句が照応表現として用いられる場合、その先行詞の指示対象が談話モデルのどこに存在しているかが問題になる。談話モデルのなかで、指示対象が存在する談話領域を、次の三つに分けて考える⁵⁾。

5) これとよく似たモデルは Ariel (1990)、坂原 (1996)でも提出されている。

(14) 指示対象の存在領域

- a. Shared Knowledge 共有知識
- b. Context of Use 発話状況
- c. Linguistic Context 言語文脈

共有知識領域とは、談話以前に話し手と聞き手がともに所有していると考えられる世界についての百科事典的知識、および談話の開始以前に話し手と聞き手が共有している知識領域である。これらは談話開始の時点で、初期値として働く。

発話状況とは、話し手と聞き手を含み、発話が行われている時空間と、その場に存在している実体をすべて含む。これもまた談話の初期値である。

言語文脈とは談話によってもたらされる情報であり、談話の開始時点では、その初期値はゼロである。

まず代名詞・定名詞句・指示形容詞句の三つの指示表現について、それぞれの指示領域の範囲を考えてみたい。

普通、代名詞は必ず先行文脈や後続文脈に先行詞を必要とし、その指示対象の存在領域は言語文脈に限定されると考えられている。これは概ね正しいのだが、次のように先行詞のない代名詞が出現することがないわけではない。

- (15) a. Dans le métro parisien depuis quelques mois, une affiche publicitaire. On y voit un couple enlacé, bouche à bouche. **Il** la tient dans ses bras, renversée. (Reichler-Béguelin 1993)

“In the subway of Paris since several months ago, (there is) a poster. We see on the poster a couple embracing each other, mouth to mouth. He is holding her in his arms.”

- b. [Jean is trying to put a large table into the car trunk. Marie says to him]

Tu n’arriveras jamais à **la** mettre dans la voiture.

“You’ll never succeed to put it into the car.” (Tasmowski-de Ryck & Verluyten 1982)

例a. は直接の先行詞のない連想照応の例である。例b. は代名詞がいわゆる語用論的コントロールを受けていて、発話の場にあるモノを直接にさしているように見える例である。これらの例は、代名詞はすべて言語文脈中に先行詞を必要とするという主張に対して、有効な反例となりうるが、ここではこれ以上深く追求することはできないので、別の機会に譲りたい。いずれにせよ、上にあげたような例が成立するためには、条件が必要なので、代名詞の指示領域はやはり狭く、概ね言語文脈に限定されると当面は考えてよい。

一方、定名詞句は共有知識・発話状況・言語文脈のすべてを指示領域とすることができる。次はそれぞれの例である。

(16) 定名詞句の指示領域

- a. Shared Knowledge

La baleine est un mammifère. “The whale is a mammal.”

- b. Context of Use

Ferme la porte. “Shut the door.”

- c. Linguistic Context

Un homme descendit du train. L’homme portait une valise noire.

“A man got off the train. The man had a black suitcase.”

ここで重要な点は、このように談話モデルをたてて指示領域を指定した場合、定名詞句の照応的用法と、それ以外の用法とを区別する必要がなくなるということである。例 a. の総称用法も、例 b. の外部指示的用法も含めて、定名詞句は談話モデルのどこかの領域にすでに存在する指示対象をさすと一般化することができる。

また指示形容詞句も上記すべてを指示領域とすることができるように見える。

(17) 指示形容詞句の指示領域

a. Shared Knowledge

Ah, *ces Italiens* ! “Ah, those Italiens !”

Tu te souviens de nos vacances? Ah, *cette mer, ce soleil*...

“Do you remember our vacation? Ah, that sea, that sun...”

b. Context of Use

[指さして] *Donnez-moi ce stylo*. “Give me this pen.”

c. Linguistic Context

Une femme est entrée. J'avais vu *cette femme* chez un ami.

“A woman came in. I had seen this woman in the house of a friend of mine.”

これを見る限り、定名詞句と指示形容詞句の指示領域は、談話モデルのすべての領域にわたっており、同じように見える。しかし、このふたつの指示の方略はまったく異なるものである。

3.2. 直接指示と間接指示

指示形容詞句のプロトタイプの用法は、発話の現場指示であると考えることができる。その定型的なケースは、指さし行為である。

(18) [指さして] *Donnez-moi ça*. “Give me this.”

指さしに代表される指示行為には、次のような特徴がある。

- (19) a. 発話状況からの直接的指示である
- b. 指示表現の語彙内容に依存しない
- c. 指示対象の名前・所属カテゴリーがわからなくても指示できる
- d. 新たな指示行為によって、指示領域を分割できる

a. はこの指示行為が、何か他の行為・情報を媒介した指示ではないことを意味する。b. はまず指示の用いられた語の語彙内容があつて、その内容に一致する対象を探索するという指示行為ではなく、語彙内容に依存せずに直接的に指示対象が与えられることを意味する。c. は b. の系で、直接的指示であれば、対象の名前や、カテゴリーがわからなくても指示できることを意味する。

また発話の現場指示では、話し手の指示意図を示す指さし行為によって、指示領域を自由に分割することができる。

(20) *Donnez-moi ça et ça et ça*. “Give me this and this and this.”

この場合、ça を複数回繰り返すと、そのたびごとに異なる指示対象をさすことに注意しよう。指示対象は話し手の指示意図のみによって決定されるのである。

指示形容詞句については、文脈指示用法においても同様の現象が見られる。Kleiber (1991) は、次の例のように定名詞句を反復した場合には同一の指示対象をさすが、指示形容詞句の反復では、そのたびごとに異なる指示対象をさすと指摘している。例a.では大統領は一人だが、例b.では大統領は三人いることになる。

- (21) a. *Le président est parti. Le président lit. Le président dort.*
 “The president left. The president is reading. The president is sleeping.”
 b. *Ce président est parti. Ce président lit. Ce président dort.*
 “This president left. This president is reading. This president is sleeping.” (Kleiber 1991)

これも上記の例と同様に、直接指示による指示領域の分割の例である。一方、定名詞句の方は、言語文脈で指示対象が決まったものを指示し続けるだけで、指示形容詞句のように途中で指示対象を変更することができない。

なぜこのようなちがいが見られるのだろうか。ここでは Kripke (1972)、Kaplan (1989) の説に基づいて、指示形容詞句は直接指示的で固定指示的であるが、定名詞句は間接指示的で非固定指示的であると考えたい。

固定指示的というのは次のような意味である。

「ある言葉があらゆる可能世界において同じ対象を指示するならば、それを固定指示子 (rigid designator) と呼ぼう。そうでない場合は、非固定 (nonrigid) または偶然指示子 (accidental designator) と呼ぼう。名前 name は固定指示子である。(…) 1970年のアメリカ大統領以外の誰かが1970年のアメリカ大統領であったかもしれない (たとえば、ハンフリーがそうであったかもしれない) にしても、ニクソン以外の誰もニクソンではありえなかった。同じように、ある指示子が特定の対象を、それが存在する限り常に指示するならば、その指示子はその対象を固定的に指示している。(…) たとえば、「1970年のアメリカ大統領」はある特定の男、ニクソンを指示する。しかし、ニクソンではなく、他の誰かが1970年のアメリカ大統領だったかもしれない。それゆえ、この指示子は固定的ではない。」 (Kripke 1972)

Kaplan (1989)の図式に従って、直接指示・固定指示とは何かを説明しよう。

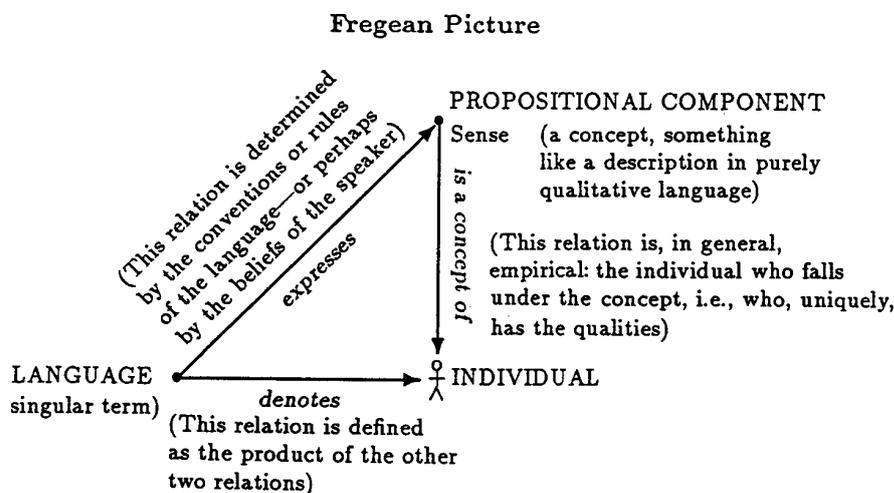


図 1

図1の Fregean Picture は間接指示・非固定指示の図式である。ここでは *le président* のような定名詞句の図式と考えていただきたい。言語表現として与えられた単称名 singular term は、まず命題内容の一部を構成するものとして、三角形の頂点の Propositional Component に送りこまれる。聞き手はこのように命題内容の一部を成した単称名の指示対象を、命題の一部を成す語彙内容を手がかりに探索することになる。したがって、図式で三角形の頂点から下の指示対象へと至る矢印は、下向きであることに注意されたい。指示表現は、対象を直接に指示するのではなく、いったん命題内容の一部となってから対象を指示するという意味で、これは間接指示である。

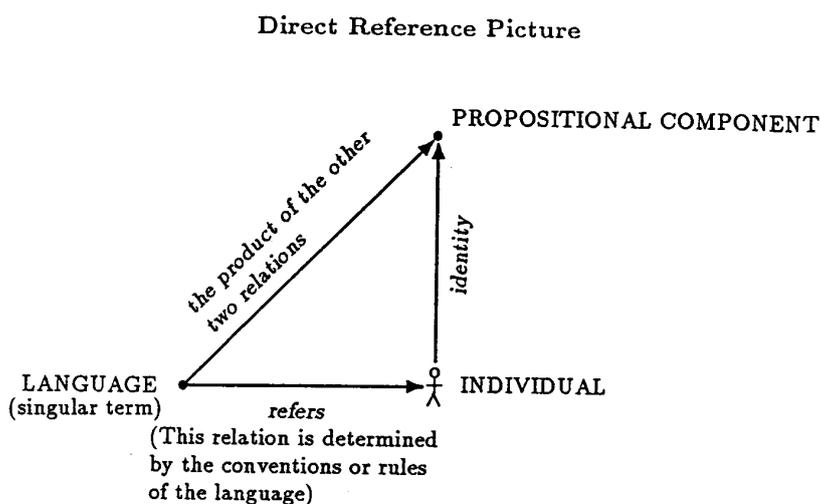


図 2

図2の Direct Reference Picture は直接指示・固定指示の図式である。ここでは *ça* などの指示詞や、*ce président* のような指示形容詞句の図式として考えておく。言語表現として与えられた単称名は、右向きの矢印の示すように直接に指示対象を指示する。このように直接的に確保された指示対象は、今度は三角形の頂点方向へと向かう矢印の示すように、命題内容へと送りこまれる。

3.3. 談話世界と直接指示

ではこのような分析でどんな言語事実が説明できるだろうか。ここで(19) であげた直接指示の特性をもう一度掲げ、間接指示と比較してみよう。

(22) 直接指示の特性

- a. 発話状況 (Context of use) からの直接的指示である
- b. 語彙内容に依存しない
- c. 対象の名前・所属カテゴリーがわからなくても指示できる
- d. 新たな指示行為によって、指示領域を分割できる

(23) 間接指示の特性

- a. 値踏みの場合 (Circumstances of evaluation) からの間接指示である
- b. 語彙内容に依存する
- c. 対象の名前・所属カテゴリーがわからなければ指示できない
- d. 指示領域を分割することができない

ここで「発話状況」とは、指示表現を用いる話し手のいる発話の場合である。また「値踏みの場合」⁶⁾とは指示表現が用いられた命題の真偽が決められる場合をいい、ここでは構築された談話世界、特に談話モデルにおける言語文脈領域のことを指す。

直接指示と間接指示の違いは、次のような定名詞句と指示形容詞句の容認度の差を説明する。

- (24) a. Un avion s'est écrasé hier. { **L'avion** / ?**Cet avion** } venait de Miami.
 "An airplane crashed yesterday. {The airplane / This airplane} was coming from Miami."
 b. Un avion s'est écrasé hier. { ?**L'avion** / **Cet avion** } relie habituellement Miami à New York.
 "An airplane crashed yesterday. {The airplane / This airplane} links habitually Miami and New York." (Kleiber 1986)
- (25) a. **Le sommet** est encore loin.
 "The summit is still far."
 b. **Ce sommet** est encore loin.
 "This summit is still far." (容認度 a. > b.) (Kleiber 1987)
- (26) a. J'ai escaladé **le sommet** l'année dernière.
 "I have climbed the summit last year."
 b. J'ai escaladé **ce sommet** l'année dernière.
 "I have climbed this summit last year." (容認度 a. < b.)

(24) a.では談話世界、すなわち値踏みの場合には飛行機が墜落した時点で一貫しており、定名詞句のほうが容認度が高い。一方、b.では第一の文の値踏みの場合には墜落の時点であるが、第二の文は習慣的現在で、値踏みの場合の断絶が観察できる。このときは、指示形容詞句の方が容認度が高いのである。

(25)は登山中の発話である。登山中に「頂上はまだ遠い」という発話をする場合には、値踏みの場合には一貫しており、定名詞句の容認度が高い。一方、(26)では逆に指示形容詞句の容認度が高い。この発話は現在の登山という値踏みの場合を離れて、過去の登山経験という別の値踏みの場合に言及しているためである。

このように値踏みの場合が終始一貫している場合は、定名詞句指示が最も適切であるが、いったん設定された値踏みの場合を離れて、異なる場面や視点を前提とする値踏みの場合からの発話を行なう場合には、指示形容詞句による指示のほうが適切になることがわかる。

これは定名詞句が間接指示であり、それが用いられた命題内容を通して指示対象が確保され、しかもその確保はその命題が用いられている値踏みの場合の内部でのみ有効であるという指示特性の帰結に他ならない。

さて、最初に問題にした次の例文に立ち戻ろう。

6) context of use / circumstances of evaluation はともに Kaplan (1989) の用語である。circumstances of evaluation を「値踏みの場合」と訳したのは野本 (1997) であり、この訳語を採用する。

(27) (= (3))

- a. Il y a un dictionnaire sur la table. { Ce / *Le } dictionnaire ... (Milner 1976)
- b. Il était une fois un prince. { ?Le prince / Ce prince } (Kleiber 1986)
- c. Il était une fois un prince. ?Il était grand et fort. (*Ibid.*)

この「直後の受け直しのパラドックス」は、定名詞句と指示形容詞句の指示のちがいによって初めて理解することができる。既に述べたように、定名詞句による指示は、言語文脈によって設定された値踏み場(すなわち特定の時空に設定された物語世界)を通しての指示である。したがって、間接指示が可能な値踏み場があらかじめ設定されていることが必要になる。ところが上の例のような提示文は、提示された対象が存在するというもののみを述べ、それ以外のことを述べていない。これでは定名詞句による指示が必要とする十分な値踏み場が設定されない。これが上記の例で定名詞句指示の容認度が低い原因なのである⁷⁾。

Kleiber (1986)は上記のような発話でも、演劇の舞台設定を描写している場合ならば容認度が向上するという興味深い指摘している。これは舞台という場の指定が、それにまつわる言語外的知識を発動させ、定名詞句による指示に必要な値踏み場として働くためである。

第4章 談話モデルと指示対象の同定

4.1. First-mention definite NP

ふつう談話に新しい指示対象を導入するときには、不定名詞句として導入すると言われている。いったん不定名詞句によって導入された指示対象は、後続談話で代名詞などの照応表現でさすことができるようになる。これは教科書文法などでよく言われるように、最初に出てくるときは不定冠詞、二度目以後の言及では定冠詞や代名詞という談話の流れである。

(28) Bill has a car. {**The car** / **Bill's car** / **It**} is black. (Karttunen 1976)

ところが実際の談話を分析してみると、上で述べたことは実状と一致していないことがわかる。

会話コーパス分析によれば、最初に不定名詞句で指示対象が導入され、次にそれを定名詞句や代名詞で受けるという定石どおりの例は、実際には言われているよりは少ないことが報告されている。

(29) First-mention definite NP

- 先行詞あり : 36%
- 先行詞なし : 64% (Fraurud 1996)

(30) First-mention NP (613例)

- 不定名詞句 : 66%
- 定名詞句 : 34% (Du Bois 1980)

⁷⁾ 人称代名詞 il による指示にも十分な値踏み場が必要だと考えられるが、この点は本稿ではこれ以上追求しない。

(31) First-mention inanimate NP (467例)

不定名詞句 : 59%

定名詞句 : 41% (*Ibid.*)

Fraurudの調査では、スウェーデン語で初出定名詞句のうち64%が先行詞なしで出現している。またDu Boisの調査では、英語の初出名詞句のうち34%が定名詞句であるという。モノを表す名詞に限ると、41%が定名詞句である。このように、いきなり出てくる定名詞句は意外に多いのである。これはどのように理解すればよいだろうか。

4.2. 名詞句と存在前提

原則として、定指示表現の指示対象は談話モデルのいずれかの領域に既に存在していなくてはならない。談話モデルに存在する指示対象は、存在前提を持つと言われる。金水(1997)は、日本語では存在前提のある名詞句は次のようなものだとしている。

(32) 存在前提のある名詞句 (金水 1997)

a. (裸の) 固有名詞 : 田中さん、さっちゃん

b. 慣習・文脈によって特定の個人をさすことが明らかな名詞句 : おとうさん、社長

c. 総称名詞句 : 犬はかしこい

d. 直示表現 : 私、あの人

e. 照応表現 : その人、男

では、上のa.からe.まではどこから存在前提を得ているのだろうか。

固有名と、総称文に現れた自然種名は、談話の開始以前から談話モデル内の共有知識領域に登録されているので、すでに談話モデル内に存在し、存在前提を持つと言える。

またd.のような直示表現は直接指示であり、発話の場からの指示行為によってその存在が確保されるので、存在前提は指示と同時に確保される。e.のような照応表現の存在前提は、先行する言語文脈が与えているので問題ない。

残るはb.である。なぜb.の名詞句は、存在前提のあるものとして扱われるのだろうか。この問題を考えるには、われわれはどのように指示対象の存在前提を認定するのか、また指示対象は談話モデルの中でどのような存在様態を持っているのかを考えなくてはならない。

4.3. 名詞句の存在論

Fraurud (1996)は興味深い名詞句の存在論を提唱して、談話における名詞句の指示対象の同定という問題に一石を投じている。Fraurudは名詞句で指示される存在を、次のような三つのカテゴリーに分類している。

(33) a. Individuals : 最も独立性の高い個体的存在。Who? Which one? の答えとなる。

b. Functionals : 談話世界内の他の実体 (anchor) との関係においてのみ存在する。
Whose? Of whom / which? の答えとなる。

c. Instances : 個体としてよりも所属するカテゴリーの一例としてのみ認識される。
What? の答えとなる。

それぞれの名詞タイプの典型例は、次のものであるとされている。

- (34) a. Individuals : 固有名
 b. Functionals : 定名詞句
 c. Instances : 不定名詞句

以下に実例をあげておく。

(35) Individuals

Charlie Muffin tried to prove his innocence in vain.

(36) Functionals ([]内は anchor を示す)

- a. *the postman* [of a certain district] [at a particular day]
 b. *the mother* [of someone]
 c. *the author* [of a book]
 d. *the windscreen* [of a car]

(37) Instances

- a. He gave me *a glass of wine*.
 b. A man was picking *pears* in what seemed to be his orchard...

ここで注目されるのは、Functionals 型の名詞句である。このタイプの名詞句は anchor と呼ばれる他の名詞句との関係でその存在が認識される。このタイプの名詞句の顕著な特徴は、初出でも定名詞句で出現することが多く、それが義務的でさえあるという点である。

次は子供のフランス語の談話コーパス (Sueur 1990) から取った例である。ボード体の名詞句はすべて初出でありながら、定名詞句である。

(38) a. et pi le chat il était toujours en train de passer **la patte** derrière **l'oreille**

“and then the cat he was always passing his hand behind his ear”

- b. pi un jour **les parents** ils étaient pas contents

“then one day the parents they were not satisfied”

- c. elles ont fait appeler tous les animaux de la ferme dans **la cuisine**

“they ordered to call up all the animals of the farm in the kitchen”

- d. et pi un jour **les propriétaires** ils en avaient marre

“and then one day the owners they were disgusted”

文中に定名詞句が用いられた場合、聞き手はそれによって指示対象を同定できなければならない。同定のためには、対象が存在前提を持たなくてはならないのだが、上の例ではどこから存在前提を得ているのだろうか。

Fraurud の提起している問題は、実は指示対象の同定にも様々なレベルがあることを示している。ここではそれを同定の「深度」と呼んでおこう。同定の深度は、同定に必要な知識の関数である。Individuals の同定に必要なものは token 知識、すなわちその個体そのものに関する知識であり、典型的なものは固有名である。一方、Functionals と Instances の同定に必要なものは、type 知識であり、type 知識は anchor との関係を示す relational 知識と、所属するカテゴリーを示す sortal 知識に下位分類される。

(39) 名詞句の指示対象の同定に必要な知識

- a. Individuals : token 知識 (ex. ナポレオン、夏目漱石)
- b. Functionals : type 知識 (relational) (ex. [私の] 従兄弟)
- c. Instances : type 知識 (sortal) (ex. 「これは何?」「チーズの一種です」)

Individuals は談話モデル内の共有知識領域に登録された token 知識を発動することで同定される。ナポレオンが誰だか知らない人は、「ナポレオン」の指示対象を同定することができない。これは同定の深度の最も深いレベルである。次の対話に齟齬があるのは、聞き手が固有名「羽柴さん」の指示対象についての token 知識を持たないからである。

- (40) A: 昨日羽柴さんと箕面に行ったよ。
B: 羽柴さんって誰?

Functionals は anchor との関係を表す type 知識を発動することで同定される。Individuals よりも浅いレベルの同定である。type 知識は共有知識領域内に登録された、われわれの一般的知識であるか、あるいはそこから自然に推論されるものであればよい。次の対話がスムーズに進行するのは、聞き手が持つ知識をもとにして、「私のピアノの先生」が anchor である「私」との関係において(浅く)同定されるからである。この場合、聞き手はその先生の名前・性別などの token 知識を一切必要としない点に注意されたい。

- (41) A: 私のピアノの先生がイタリア旅行中に掏摸に会ってね。
B: それはたいへんでしたね。

Instances は分類的な type 知識で同定されたものとみなされ、最も浅いレベルの同定である。この場合、同定の対象となるのは、個々のワインではなく、話題にされたものが「ワイン」というカテゴリーに属するという情報のみである。

- (42) A: 先日とてもおいしいワインを見つけましたよ。
B: どこですか?

同一の指示対象が、この3段階のレベルのそれぞれで同定されることがある。

- (43) a. Could you help me please — **Harry O'Rourke** just had a heart attack. (Individual)
b. Could you help me please — **my husband** just had a heart attack. (Functional)
c. Could you help me please — **a man around fifty** just had a heart attack. (Instance)
(Prince 1978の例文を一部改変)

同一の指示対象が、a. では Individuals として、b. では Functionals として、c. では Instances として同定されている。談話モデルを共有しない初対面の人に a. を発話すると、聞き手は同定に成功しない。聞き手は指示対象についての token 知識を持たないからである。一方、同じ状況でも、b. と c. の発話では、同定は成功する。必要とされているのは type 知識であり、より浅い深度の同定で十分に事足りるからである。

実際にどの段階の同定を必要とするかは、話し手と聞き手の談話モデルの共有度や、対

象名詞句が談話のなかで果たす役割によって決定されるが、対象そのものの性質によっても決まることがある。

例えば、指示対象が人の場合は、すでに最低レベルのtype 同定、すなわちカテゴリー化が済んでいるので、Instancesとして同定されると適切な答えにならない。

- (44) Qui est-ce? “Who is this?”
a. C’est Yves Duteuil. (Individual) “This is Yves Duteuil.”
b. C’est mon cousin. (Functional) “This is my cousin.”
c. *C’est un homme. (Instance) “This is a man.”

また、モノは Functionals レベルまでの同定はできるが、個性性が低いために Individuals レベルの同定を考えることは難しい。

- (45) Qu’est-ce que c’est ? “What is this ?”
a. *C’est Charles⁸⁾. (Individual) “This is Charles.”
b. C’est la voiture de mon père. (Functional) “This is my father’s car.”
c. C’est un ordinateur du dernier modèle. (Instance)
“This is a computer of the latest model.”

必要とされる同定の深度は、概ね次のような要因によって決まると考えられる。

- (46) 同定の深度を決定する要因
a. 指示対象固有の性質 (ex.human / inanimate, etc.)
b. 話し手と聞き手のあいだでの談話モデルの共有度
c. 指示対象が談話のなかで果たす役割

このことは、伝統的に冠詞論で問題にされてきた次の例を説明することができる。

- (47) “Still more strange is the sentence : *towards evening we came to the bank of a river*. Every river on earth inevitably has two banks. Here, however, only *the* is possible...”
(Christophersen 1939)

常識的には川には土手はふたつあるのに、なぜここでは **the** bank of a river という単数定冠詞の **the** による指示が行われるかという問題である。この問題は、この名詞句が the bank [of a river] という functionals であると考えerことで解決がつく。この談話では、問題の土手がふたつあるうちのどちらの土手かという個性性を問題にしているのではない。「川の土手」という type 知識による関係によって浅く同定できれば、この文脈での発話意図には十分なのである。

また Instance 型の不定名詞句は、カテゴリー同定が基本であり、個性性が低いので、後続談話で再び照応されることが少ない。次の例のように、一度出てきたきり、後続談話で二度と取り上げられない不定名詞句が多い⁹⁾。

8) 一見して人とわからない状態になっている物 (例えば腐乱死体) の場合や、自分の車にあだ名をつけて擬人化している場合には、この答は可能である。

- (48) et pi il tombait toujours **de l'eau**, et pi les moissons du fermier ils étaient un peu trop humides...
 “and then there was always some rain, and then the crop it was a little bit too wet”

第5章 結論にかえて

こここまでで「直接指示・間接指示」「発話状況・値踏みの場合」、「談話世界の一貫性」「同定の深度」といった、談話モデル構築のための道具立てを用いることで、様々な問題を説明することができることを示した。最後に同様の操作概念を用いることで、フランス語学で伝統的に問題にされてきた、コピュラ文の主語位置における人称代名詞 **IL** と指示代名詞 **CE/ÇA** の交替現象にも、新たな光を当てることができることを示唆しておきたい。

コピュラ文の主語での人称代名詞 **IL** の使用は、値踏みの場合からの間接指示であり、またその指示対象がすでにカテゴリー化されていることを前提とする。従って、すでに Instances レベルの同定がなされていなければ、**IL** を用いることができない。一方、指示代名詞 **CE** は、発話状況からの直接指示であり、いかなる同定も前提として必要としない。このため Instance レベルの同定を行なうためには、もっぱら **CE** が使われることになる。

- (49) Qu'est-ce que c'est ? “What is this ?”
 a. ***IL** est un crayon. “It (masc. sing.) is a pencil.”
 b. **C'**est un crayon. “It (neuter) is a pencil.”

次に、人称代名詞 **IL** は、値踏みの場合の内部における照応の連鎖を前提とした間接指示であるのにたいして、指示代名詞 **CE** は発話の場合からの直接指示であるということから、次のような点を説明することができる。

- (50) **IL** は名詞句の代用表現であるが、**CE** はそうではない。
 a. Je comprends mal ton histoire. **Elle** est curieuse.
 “I don't understand well your story. It (=your story) is strange.”
 b. Je comprends mal ton histoire. **C'**est curieux.
 “I don't understand well your story. It (=the fact that I don't understand well your story) is strange.”

- (51) **IL** は登場人物の内的視点を、**CE** は話し手の外的視点を表す
 a. Napoléon, **c'est** un vainqueur impitoyable.
 “Napoléon, it (=neuter) is a merciless winner.”
 b. Napoléon entrait dans la ville, { **il était** / ***c'était** } un vainqueur impitoyable et il voulait que tous le sachent. (Coppieters 1975)
 “Napoléon enter the city, {it (=masc.) / it (=neuter) } was a merciless winner and he wanted that everybody should know it.”

CE が常に話し手の立脚する発話状況からの指示である以上、**CE** による指示が話し手の視点を反映するのは当然である。これは談話にたいする「外的視点」となって実現する。一方、**IL** はすでに成立している談話世界の値踏みの場合に依存してその指示が決定されるの

9) Fraurudによれば、1224例の不定名詞句のうち929例(75.8%)は再び出て来ないという。Wijk-Andersonは「不定名詞句は discourse referent を導入することは少ない」と述べている (Fraurud 1996 : 72)。

であるから、外的視点の入る余地はなく、内的視点を表すことになる。この問題についての詳しい分析はまた稿を改めて行ないたい。

【参考文献】

- Ariel, M. (1990) : *Accessing Noun-Phrase Antecedents*, London, Routledge.
- Chafe, W. L. (ed.) (1980) : *The Pear Stories : Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Norwood, Ablex.
- Christophersen, P. (1939) : *The Articles. A Study of their Theory and Use in English*, Copenhagen, Einar Munksgaard.
- Clancy, P. M. (1980) : “Referential choice in English and Japanese narrative discourse”, in W. L. Chafe (1980) 127-202.
- Coppieters, R. (1975) : “The opposition between IL and CE and the place of the adjectives in French”, *Harvard Studies in Syntax and Semantics* 1, 221-280.
- Corblin, F. (1983) : “Défini et démonstratif dans la reprise immédiate”, *Le français moderne* 51, 118-134.
- Corblin, F. (1987) : *Indéfini, défini et démonstratif. Construction linguistiques de la référence*, Genève, Droz.
- Du Bois, J. W. (1980) : “Beyond definiteness : the trace of identity in discourse” in W. L. Chafe (ed) , 203-274.
- Fretheim, T. & J. K. Gundel (1996) : *Reference and referent accessibility*, Amsterdam, J. Benjamins.
- Fox, B. (1987) : *Discourse Structure and Anaphora*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Fraurud, K. (1996) : “Cognitive ontology and NP form”, in T. Fretheim & J. K. Gundel (ed.), 65-88.
- Giora, R. and C. L. Lee (1996) : “Written discourse segmentation : the function of unstressed pronouns in Mandarin Chinese”, in T. Fretheim & J. K. Gundel (ed.), 113-140.
- Haegeman, L. (1984) : “Remarks on adverbial clauses and definite NP anaphora”, *Linguistic Inquiry* 15-4, 712-15.
- Hinds, J. (1977) : “Paragraph structure and pronominalization”, *Papers in Linguistics* 10, 77-99.
- Kaplan, D. (1989) : “Demonstratives”, J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (ed.) *Themes from Kaplan*, Oxford, Oxford UP. 481-563.
- Karttunen, L. (1976) : “Discourse referent”, J. McCawley (ed.) *Syntax and Semantics 7, Notes from the linguistic underground*, New York, Academic Press, 363-386.
- Kleiber, G. (1984) : “Sur la sémantique des descriptions démonstratives”, *Linguisticae Investigationes* VIII-1, 63-85.
- Kleiber, G. (1986) : “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate”, *Langue française* 72, 54-79.
- Kleiber, G. (1987) : “L’énigme du Vintimille ou les déterminants «à quoi»”, *Langue française* 75, 107-121.
- Kleiber, G. (1991) : “Sur les emplois anaphiriques et situationnels de l’article défini et de l’adjectif démonstratif”, D. Kremer (ed) *Actes du XVIII^e congrès international de linguistique et de philologie romanes*, tome II. Tübingen, Niemeyer.
- Kripke, S.A. (1972) : *Naming and Necessity*, Oxford, B. Blackwell & Harvard University Press. (『名指しと必然性』産業図書)
- Milner, J.-C. (1976) : “Réflexions sur la référence”, *Langue française* 30, 63-73.

- Prince, E. F. (1978) : “On the function of existential presupposition in discourse”, *CLS* 14, 362-376.
- Reichler-Béguelin, M. J. (1993) : “Anaphores associatives non lexicales : incomplétude macrosyntaxique?”, S. Karolak & T. Muryn (ed.) *Complétude et incomplétude dans les langues romanes et slaves*, Cracovie, Wydawnictwo Naukowe WSP. 327-379.
- Reichman, R. : (1978) “Conversational coherency”, *Cognitive Science* 2
- Reinhart, T. : (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*, Worcester, Croom Helm
- Sueur, J.-P. (1990) : “Sur la syntaxe du récit oral”, *Linguisticae Investigationes* XIV-1, 95-148.
- Tasmowski-de Ryck, L. & S. P. Verluyten (1982) : “Linguistic control of pronouns”, *Journal of Semantics* 4, 323-346.
- Toole, J. (1996) : “The effect of genre on referential choice”, in T. Fretheim & J. K. Gundel (ed.), 263-290.
- 井元秀剛 (1989) : 「le Nとce Nによる忠実照応」、『フランス語学研究』23号、25-39.
- 金水 敏 (1997) : 「日本語の存在表現と範疇化」、フランス語学談話会ハンドアウト
- 坂原 茂 (1996) : 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」、『認知科学』3-3, 38-58.
- 春木仁孝 (1986) : 「指示形容詞を用いた前方照応について」、『フランス語学研究』20号、16-32.
- 三藤 博 (1989) : 「フランス語における c'est / il est, ce N / le N の対比について」、『フランス語学研究』23号、60-66
- 野本和幸 (1979) : 『意味と世界』、法政大学出版局